

書評

事典としての有用性を超えた、 読み応えのある書

泉 孝英(編)

〔評者〕 猪飼 周平

一橋大学大学院 社会学研究科 准教授(比較医療史)

『日本近現代医学人名事典【1868-2011】』

本書は、呼吸器内科を専門とする医学者が14年にわたり、明治期以降日本の近代医学・医療の発展に貢献した3762名(物故者)の履歴を調べあげた成果である。評者のように、明治期以降の医業関係誌を参照する機会の多い者にとっては、このように便利かつ確度の高いレファレンスが完成したことは、大変喜ばしいことであり、そのありがたみは今後随所で感じられることになるであろう。編者の長年のご苦勞に感謝したい。

とはいえ、本書を単に事典として理解するとすれば、書評の対象とする必要はないかもしれない。そこで以下では、本書を約800ページの読物と解してその意義を考えてみたい。

まず、本書に掲載されている人物の履歴を見ると、医師が大部分(3383人)であり、またその大部分が大卒(3027人)で占められている。戦前において大卒の医師免許の下付数はおよそ1万6000人であり、その大部分が物故していると考えれば、ざっと見て大卒医師の2割弱の履歴を本書がカバーしていることになる。このように理解すると、本書はどのように読めるだろうか。

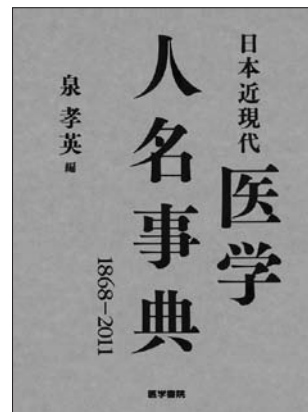
なにより、近代医学において戦前の大卒医が選び抜かれたエリートとしての役割を担っていたということである。後世の医学者(編者)の視点から見て、近代医学・医療の発展に貢献したと評価できる大卒医が、大卒医の少なくとも2割近くもいるというのは、いかに大卒医が実質を備えたエリート集団であったかを物語っている。

実際、掲載されているその履歴を読んでもみると、大学教員を経ている者が多く、概して大変華々しいものであると言える。これは、例えば大正期に初版が刊行された『日本医籍録』(版によっては国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで利用できる)と比較す

るとわかりやすい。

戦前を通じて、医師にはおおまかに言って、上から「大卒、医専卒、試験及第医、従来開業医」という4つの階層があった。『日本医籍録』の場合、試験及第医や従来開業医の掲載が多く、その経歴も、資格取得後比較的早く開業するのが一般的であった。そのような医師たちにとっては、開業地に地盤を形成し、市郡レベルの医師会などで社会的地位を確保してゆくキャリアが成功のパターンであったと言えよう。これに対して、本書に掲載されている大卒医たちは、基本的に大学の教員としてのキャリアを経ている者が多い。本書に収載されている医専卒(医学校卒含む)が316人とどまっていることから示唆されるように、医専を卒業して教員のキャリアを登った事例は少ない。ここから、戦前日本の医師4階層の中で隔絶した最上位階層として、また他の階層の医師たちとは異なった使命を帯びた存在として、大卒医(少なくともその2割)があったことを読み取ることができるだろう。

もちろん、評者のように本書を読むというのは、おそらく一般的な利用法ではないだろう。ただ、読物として読み応えがあることが良い事典の条件の1つであるとするならば、少なくとも評者には、本書は単なる事典としての有用性を超えた良い事典であると言える。



A5 頁810 2012年
定価 12,600 円(本体 12,000 円+税 5%)
ISBN978-4-260-00589-0 医学書院刊